

添い寝が子どもの信頼感・自立心・依存心へ及ぼす影響について

専攻 人間教育専攻
コース 幼年発達支援コース
氏名 吉田美奈

指導教員 浜崎隆司

目的:アメリカでは、一人寝が自主性を育て、親への依存心を小さくすると考えられており、乳幼児のころから個室で一人寝させる習慣がある。一方、日本では添い寝により乳児が相互依存的な関係を持つことができる人間へと変容していくことを促す働きを正在と考えている。では、添い寝が主流の日本では子どもの依存心が大きくなり、自立心が育ちにくいのだろうか。

子どもは特定の人物と社会的な交わりを持たば持つほど、その人物に愛着するようになるものである。したがって、親が子どもの発するシグナルに応答的である場合、夜間添い寝をすることで親子間の相互行為が増加し、子どもはより安定した愛着を形成することができる。

本研究では、ボウルビイの愛着理論より、愛着の形成という観点から夜間の添い寝が子どもの信頼感・自立心および依存心に及ぼす影響を探る。

方法:徳島県および長崎県の大学生・大学院生304名を対象に幼い頃の添い寝の実態と信頼感、自立心、依存心などについて質問紙調査を行い、回答を得た。うち、不備のあるものを除

く278の回答について分析を行った。男性の割合は約42.8%、女性の割合は約57.2%であった。

分析ではまず、親との添い寝経験のある学生と添い寝経験のない学生について、信頼感、依存心、自立心をはじめとする各尺度の得点を比較した。また、添い寝経験のある学生については、添い寝をしなくなった時期について0~3歳、4~5歳、6~12歳と13歳以上に分け、各尺度の得点を比較した。

結果・考察:添い寝経験がある者は添い寝経験がない者より他者への信頼感、自立心および自尊感情が高いが、依存心も高いことが示された。このことから、添い寝が子どもの信頼感、自立心を高めるのに有効であると言える。

自立心と依存心が同時に高くなることについては、先行研究により自立心と依存心が独立した関係であることが明らかにされており、矛盾するものではない。また、依存には情緒的依存心、道具的依存心のようにいくつかの面があり、一方的に相手によりかかるようなネガティブな面ばかりではなく、相手に依存すると同時に相手が自分に依存することを受け入れられる、

相互依存と呼ばれる望ましい面を持つことも示されている。

添い寝をする期間は、依存性に関わることを示された。男性の場合、13歳以上まで添い寝すると情緒的依存性が高くなるという結果が出た。同時に、親が子どもとの密接感を重視した養育を好み、子どもの依存心を高めた場合に高くなるANBIVARENT得点も13歳以上まで添い寝した時に最も高くなっており、相互に矛盾しない結果となった。女性については、添い寝の時期による有意な差は見られなかった。

添い寝をする位置については、両親の間で添い寝をしていた者の自立心が最も高いことが示された。また、両親の間で添い寝をした場合、0～3歳までで添い寝をやめた場合に最も信頼感および自尊感情が高くなることが分かった。

以上から、信頼感、自立心、自尊感情を高めるには両親の間で添い寝をし、その時期は3歳までが望ましいことが分かった。また、依存心を低くするためには、男性の場合、6～12歳で一人寝を始めるのが良いということも示された。

本調査の結果では、信頼感、自立心、自尊感情を高めるためには両親の間で添い寝をするのが効果的であることが示されたが、信頼感、自立心、自尊感情を高め、同時に依存心を低くするのに適した時期を導き出すことはできなかった。ただ、上述したように依存には相互依存という望ましい面もあり、ただ単純に依存心を低

くすることのみを目指すべきでないことにも留意する必要がある。日本のように添い寝が伝統的習慣である社会においては、単純に子どもの依存心を低くしようとするよりも、一方的依存関係から相互依存関係が作れるように導く必要があると考えられる。

ボウルビィ (1973) は、特に6か月ごろから5歳までの早期のアタッチメント経験を基礎とする内的作業モデルの構成が、その後の人生にきわめて重要な意味を持つと考えた。また、2歳半くらいになると、安心感を持つ子どもは、親から離れる時間や距離を次第に増やしても平気になるとも述べている。

したがって、3歳までは両親の間で添い寝をし、3歳ごろから一人寝をさせるのが最も好ましいと考えられるが、5歳までに一人寝をさせる場合は、親に拒絶されたという意識を持たせないよう、子どもが嫌がらずに一人寝に向かおうとする心の準備ができたタイミングを見計らって慎重に行われる必要がある。

今後の展望：今回使用した尺度では、一方的依存と相互依存を区別することはできなかった。今後、添い寝によってもたらされる依存性の質的検討が必要である。今後は、相互依存について測定できる尺度を開発し、一方的に他者によりかかる関係ではなく、相互に依存できる関係を築けるような親子関係の在り方についても検討したい。